

# 私の一冊

社会福祉学科 松平 千佳 先生

ヒルダ・ルイス 作 『とぶ船』 上・下(岩波少年文庫)

小鹿図書館 908 || I 95

私の一冊、児童書の「とぶ船」を紹介します。

この本は亡き父が幼い私と兄に読み聞かせてくれた小説です。実際、私の父はとても上手に兄と私に本を読むことを勧めてくれました。本が読めるようにベッドにスタンドを取り付けたり、週末は本屋で好きな本を買ってくれました。父は寝る前に本を読んでもくれるのですが、海外で生活していた私たちに父は宮沢賢治の作品を選びました。「風の又三郎」を読む父の声を聞いていたときの、恐怖に近いけど怖さだけでないイメージを思い出します。父が児童書を選択する基準を聞いたことはありませんが、父の選ぶ本には大人の姿はなく子どもだけで構成される物語だったことに気づきます。

読み聞かせてくれた本の中で、私が最も好きだったのが「とぶ船」です。英国で生活する4人のきょうだいが、木彫りの船に乗って過去に戻り冒険する物語です。魔法の船はギリシャ神の所有物だったのですが、長男ピーターが、歯医者への帰りにお小遣いと母がくれたアイスクリーム代と帰りのバス代を払って購入しました。船は、ピーターにとって「すべて」を出しても欲しいものだったのです。バスに乗れないピーターはポケットに船を入れて海岸線を歩き始めます。満潮の波がピーターの足元をさらいかけたとき、握っていた船が大きくなりピーターは無事に家に帰ることができたエピソードから物語は始まります。

きょうだいは船に乗り、紀元前のエジプトで暗殺の危険にある皇子を救ったり、ロビンフッドとともに魔法使いの疑いをかけられた大工職人を助けます。船を返せと主張する神とピーターが向き合い、オリンポス十二神に囲まれながらゼウスの前で自分の主張を述べるピーターを描く様子に私も奮い立ちました。(ゼウスこそがピーターに船を売ってくれた店主なんです)

月日がたちきょうだいはみな青年になります。船を返しにあの小さな店に出向きます。店主は船を手に取りきょうだいの数々の冒険をたたえます。そして、船は神の元に戻っていくのです。

ピーターは小説家に。長女は医者に。次男は考古学者に。そして末っ子は子だくさんの肝っ玉お母さんになりました。物語には魔法の世界から離れていきょうだいの姿も描かれています。それは私の未来を予感させるものでした。しかし、子ども時代が大人へとつながることも教えてくれました。子ども期を守ることの大切さが秘められたこの本は私にとって大事な一冊です。子ども期を子どもらしく過ごす夢が叶うことは事実だと思います。ホイチャアの詩「充たされし希望」(内村鑑三訳)には、大きくなったら女王になりたいと願う子どもと、広い世界をみたいと願う遊ぶ2人の少女が描かれています。2人は大人になり違う形ではあるけれど願いは叶ったと言うのです。わくわくはらはらしながら「とぶ船」を聞いていた私と現在の私は確かにつながっているのでしょう。